

研究視座としての「日記文化」

——史料・モノ・行為の三点を軸として——

●田中祐介

明治以降、学校教育により読み書きの能力（リテラシー）を獲得した無数の人々が日記を綴ってきた。日記は人間の書き綴る欲望を満たす媒体であり、多種多様な日記帳文化がその欲望を支えた。一方で日記は、点検者が読むことを前提とした「書かされる」ものでもあり、書き手の行動と内面を拘束する装置としても機能した。本章は本書全体の総論として、史料・モノ・行為の三点を軸に近代日本の「日記文化」を考察する視座を提示する。

1 はじめに

「だけど、五月二十三日って、よく覚えてるね。」

「日記を見れば、直ぐ分かるわ。」

「日記？ 日記をつけてるの？」

「ええ、古い日記を見るのは楽しみですわ。なんでも隠さずその通りに書いてあるから、ひとりで読んでいても恥ずかしいわ。」注1(四二)

川端康成の代表作「雪国」の主要人物である駒子には日記を綴る習慣がある。日記は駒子にとって「なんでも隠さずその通りに」書く媒体であり、書いた内容を自ら再読して楽しむものでもある。会話の相手である島村に初めて出会った日付を覚えているのは、その日の日記を一度ならず読み返したからこそであろうか。駒子が日記を始めたのは「東京でお酌に出る少し前」の「一六歳の時で(同上)、「一番古い日記の一番始め」には、東京に向かう駒子をたった一人見送ってくれた幼馴染みのことが記してあるという(七一)。以後、駒子はずっと欠かさずに日記を綴ったと語る。

「だけど、毎日毎日ってんじゃない、休む日もあるのよ。こんな山の中だし、お座敷へ出たって、きまりきってるでしょう。今年は真ごとに日附の入ったのしか買えなくて、失敗したわ。書き出せばどうしても長くなることがあるもの。」(四三)

書くべき出来事が特になければ休む日もある一方で、「書き出せばどうしても長くなる」こともある。駒子の書くことへの欲求は、整えられた日記帳の枠組を窮屈に感じるほどに強い。出来事みの記録であれば、一日の枠内に収まるように要約のしようもある。そうできないのは、枠組を越えて溢れる心情が駒子の書く欲求の根源にあるからである。物語の後半、駒子が住まう駄菓子屋の二階を訪れた島村は、「これ、日記。」と筆筒の上を捜して言う駒子に「ずいぶんあるんだね。」と答える(一五二)。この時二一歳とされる駒子は、書き始めの一六歳からどれほど多くの日記帳を費やしたのであるか。物語の最初から最後まで、駒子の心情が直接的に描写されることはな

い。日記が「ずいぶんある」という島村の感想が示唆するのは、それほど多くの思考と喜怒哀楽が駒子の内面に生まれ、無数の言葉となって紙面に溢れ出た事実である。そこには「雪国」の視点人物である「島村の物語」を、あるいは凌駕する可能性を秘めた「駒子の物語」が内包されている。

「君の家がここか。」

「ええ。」

「日記を見せてくれるなら、寄ってもいいね。」

「あれは焼いてから死ぬの。」(五四)

「ねえ、あんた素直な人ね。素直な人なら、私の日記をすっかり送ってあげてもいいわ。あんた私を笑わないわね。あんた素直な人だと思っけれど。」(八八)

島村には駒子の日記を見たいという欲望がある。しかし駒子は「なんでも隠さずその通りに」書いた記録だからこそ、秘匿し、自己の死に際しては焼却する覚悟で、他者の目に触れないことを望む。その一方で、「素直な人」になれば、書き溜めた日記を「すっかり送って」、その全体が読まれても構わないと言う。赤裸々に吐露した自己の内面は最後まで秘匿し通すという信念と、決定的な機会と相手があればその全てを読みたいという欲望とは、表裏一体となって共存するのである。

このような駒子の日記への態度は特殊なものではない。明治以来、有名無名の無数の人々が日記を綴ってきた。自分に相応しい日記帳を選び、あるいは他者から与えられ、紙面の枠組に則り、時に抗いながら、日々の出来事の記録とともに、自己の赤裸々な内面を綴ってきた。その内容が露呈しないよう秘匿し、いつそ処分したいと願い、

それでもどこかで読者の眼差しを意識して、日記は膨大に生み出されてきた。駒子の姿は近代日本を生き、日記を綴った人々の典型であると言える。

一方で、後に詳述するように、日記とは「書かされる」ものでもある。近代日本の学校教育や軍隊教育において、しばしば日記は義務づけられた。人々は自身の欲求とは別に、日々の出来事とその都度の感想を綴り、定期的に出した。点検者は提出された日記を読み、必要に応じて赤字を入れ、書き手を励まし、時に叱責した。このように他者に見られることを前提として自己の内面を綴る行為とは、いかなる「書く文化」の現れと言えるであろうか。本書では、①綴られた日記の内容（史料としての日記）、②日記帳の体裁や生産流通（モノとしての日記）、③習慣的に日記を書き綴る営み（行為としての日記）を総称して「日記文化」と呼ぶ。近代日本において「日記文化」はどのように形成し、展開したか。日々を書き綴る無数の人々の営みは、近代日本の社会構造にどのような影響を与え、変容をもたらしたか。「日記文化」の実態と史的展開の一端を明らかにすることで、書記文化史の観点から近代日本の理解を深め、問い直す契機をつくることが本書の目的である。

本章では本書全体の総論として、史料・モノ・行為の三点を軸に「日記文化」をめぐる研究視座を提示し、その可能性を探りたい。

2 史料としての日記

日記の研究とアーカイブの現在

書き手の生活と喜怒哀楽が綴られた日記は、その私的性格ゆえに、本人や身内の意向により廃棄されることも少なくない。そうならずにも後世まで遺り、存在が再び見出され、書き手が想像もしなかった読者を得ることは、一つの劇的な物語でもある。

後世に遺された日記を私達が紐解くとき、過去の人々の生の営みに繋がり、書き手の個性とその人が過ごした時代の一端を知ることができる。後世の読み手がそこに歴史的意義を見出すとき、書き手の生きた証である日記は、史料として新たに息吹きだす。

様々な学問領域において、日記は歴史を語る貴重な史料として読み解かれてきた。近代日本の日記を扱う学術書の刊行は近年も相次いでおり、すでに完結した『日記に読む近代日本』（全五巻、吉川弘文館、二〇一〇～二〇二二年）のほか、二〇一六年に刊行が開始された『日記で読む日本史』（全二〇巻、臨川書店、二〇一〇～二〇二二年）このほか、新書版の鈴木貞美『日記で読む日本文化史』（平凡社新書、二〇一六年）や、政治史に特化した黒沢文貴・季武嘉也編著『日記で読む近現代日本政治史』（ミネルヴァ書房、二〇一七年）も上梓されている。

従来、史料の意義が見出されるのは政治家、ジャーナリスト、作家など著名な有識者の日記が中心であった。その一方で、近代日本は市井の人々が無数に日記を綴った時代でもある。学校教育制度の整備により、基本的な読み書きの能力、すなわちリテラシーを身につけた人々は急増した。一九七〇年代以降には、戦場と戦後の記録を中心に、市井の日記の出版も目立つようになる。^{注2}家永三郎『太平洋戦争 第二版』（岩波書店、一九八六年）や吉見義明『草の根のファシズム』（東京大学出版会、一九八七年）は、そのような記録に史料の意義を見出した先駆的な著作として挙げられよう。以後は様々な関心からの市井の日記出版も増え、近年の例では、早稲田で五〇年近く営業を続ける五十嵐書店の店主・五十嵐智氏の青年期の日記を取り上げた『五十嵐日記』（笠間書院、二〇一四年）や、一巻全体を多種多様な日記の翻刻で構成した画期的な『青森県史 資料編近現代 8 「日記」』（青森県、二〇一七年）などがある。

市井の日記の蒐集保全と継承に関わる活動として、一九八六年に設立され、現在も精力的な活動を続ける「女性の日記から学ぶ会」（千葉県八千代市、代表島利栄子）の活動は特筆すべきである。同会に寄贈または寄託された市井の人々の日記・書簡・家計簿は数千点に及ぶ。会員は定例会などを通じて個々の日記を読み解き、研究発表をおこない、講演やシンポジウムも定期的に開催する。同会の代表である島利栄子氏の著作には『日記拝見!』（博文館新

社、二〇〇二年）、『戦時下の母 大島静日記10年を読む』（展望社、二〇〇四年）のほか、ご自身の日記に基づく『親なき家の片づけ日記 信州坂北にて』（みずのわ出版、二〇一五年）などがある（本書の最後には鳥氏との特別対談を収録する）。また、同会の史料の読み解きの成果としては『手紙が語る戦争』（みずのわ出版、二〇〇九年）、『時代を駆ける 吉田得子日記1907―1945』（みずのわ出版、二〇一二年）などがある。

筆者自身には、大学院時代の恩師である故福田秀一氏（国文学研究資料館名誉教授、国際基督教大学元教授）が蒐集した日記コレクションの書目リストを作成した経験がある。^{注3} 日本中世の和歌をご専門とする福田氏は、時代を問わず日記とそれに関する資料を蒐集した。特に明治以降の日記資料は数が多く、①商業出版された日記、②私家版として頒布された日記、③日記本文を掲載した学術誌、一般誌やその複写版、④研究書や雑誌特集号など二次的文献、⑤手書き用の日記帳をあわせ、約四〇〇〇点にのぼる（福田日記資料コレクション）と総称する。

このうち⑤の手書き用の日記帳は、一八八七（明治一〇）年から二〇〇五年までの時代幅で計四九二冊あり、^{注4} 詳細な目録を作成して公にした（田中祐介・土屋宗一・阿曾歩「近代日本の日記帳―故福田秀一氏蒐集の日記資料コレクションより―」『アジア文化研究』第三九号、二〇一三年三月。次ページに目録のサンプルを提示する）。本書では、この手書き用の日記帳群を〈近代日本の日記帳コレクション〉と総称し、いくつかを分析対象とする。本章で取り上げる日記帳のほか、第1部1章（楠本真代）では明治期の高等小学校生の『日誌』（全六冊、711〜716）^{注5}を、第2部3章（新藤雄介）では昭和期の公務員による『昭和六年 自由日記』および『昭和八年 当用日記』（12411〜12412）^{注6}を、第4部10章（梶ひろゆき）では大正期の『教育実習日記』（3911）を取り上げる。

現状では、公的機関に所蔵されている少数の事例を除けば、市井の人々が綴った日記の多くは管理責任を個人が担っており、将来の利用を見据えた安定的な保存環境にない。個人情報のお塊である日記の学術的な利用には慎重に慎重を期さねばならないが、日記の散逸を防ぎ、未来への継承を見据えるアーカイヴ事業の推進は急務であると言える。その事業の一環として、今後はデータベース化によって近代日本における日記資料の総体的把握に一步踏み

番号	日記帳名	著者・編者	版元	発行年月日	記入者情報		記入期間	備考・特記事項
					氏名	性別		
49	軍隊日誌 大正五年十二月一日自 大正六年六月十七日至	自家製和綴				男	1916.12.1-1917.6.17	軍隊生活の詳細な記録。
50	一代日記	磯村政富(編)	東京書院	1917.11.30		未使用		箱入りの日記帳。一箱に懐中手簿も収められる。
51	大正七年 当用日記	積善館編輯所(編)	積善館	1917.9.5		男	1918.1.1-12.31	学校生活と交友の記録。
52	大正八年 うたひ日記	吉田唯雄	檜謡曲書店	1918.11.20		未使用		毎日、日記欄外に有名歌が掲載。
53	大正八年 家庭日記	大橋新太郎(編)	博文館	1918.10.15		女	1919.1.1-12.31	四版(初版無記)。日々の出来事の簡潔な記録。日記欄には金銭出納も記録される。
54	大正八年 夏期休暇日誌 福井高等女学校		今空商店	記載なし		女	1919.7.28-8.31	女子学生の夏期休暇生活の詳細に記される。母、妹、叔母の話。友人との交遊。
55-1	大正九年 当用日記	積善館編輯所(編)	積善館	1919.9.5		男	1920.1.1-12.31	家族で農業を営む。仕事と家庭生活の記録。娘は人力車で女学校に通う。
55-2	大正十年 当用日記	博文館(編)	博文館	1920.10.4			1921.1.1-12.31	
55-3	大正十二年 当用日記	積善館編輯所(編)	積善館	1922.9.5			1922.1.1-12.31	
55-4	大正十六年 当用日記	博文館(編)	博文館	1926.10.4			1927.1.1-12.11	
56	大正九年 国民日記		民友社	1919.11.15		男	1920.1.1-7.6	生活の克明な記録。毎日ほぼ必ず娘について記す。
57	大正九年 文章日記		新潮社	1919.11.20		男	1920.1.1-12.31	学校生活の記録。文学や思想の読書をよくする。銀座でクラシックレコードを購入することもしばしば。「ゆふべ急に床に入ってから快くなつて創作的な興奮にねむれなくなつてしまった」(4.10)。
58	大正十年 重要日記	実業之日本社	実業之日本社	1920.10.15		男	1921.1.1-10.19	日々の出来事の簡潔な記録。
59	大正十年 小学生日記 1921	大橋進一(編)	博文館	1920.10.4		女	1921.1.1-9.6	日記の前半と後半で執筆者が異なる。前半は学校生活と家族生活が中心。後半は別人が使用、日記欄を駅名(立川、吉祥寺、お茶の水)の書き方練習に用いる。
60	大正十年 当用日記	積善館編輯所(編)	積善館	1920.9.5		女	1921.1.9-8.4	「女学校に這いりながらたつた三年で止める人があるけれど、私は進めるところまで進みたいと思いますわ。こつちの人達は高等学校迄行けばおおよめに行くのが遅くなると考えている人が多いようだけれど」(8.2)等、兄への手紙の下書きあり(8.1-8.4)。

【表1】〈近代日本の日記帳コレクション〉目録からの抜粋

出すことも求められよう。^{注7} それにより、一人の日記を時系列に読む「つづけ読み」に加え、同時期の複数の日記を突き合わせて読む「ならべ読み」の環境も整備できる筈である。^{注8} 歴史的事実を多角的に検証するためには、この二つの方法を併用しながら、史料としての日記を読み解く必要がある。

真実と虚構——テキストとしての日記

日記は歴史を語る貴重な史料であるが、書かれた内容を鵜呑みにすることはできない。活字化された日記は、編集の過程で取捨選択と改変が伴うことも少なくない。戦争で命を失った学徒兵の手紙や日記を収めた遺稿集『きけわだつみのこえ』（東大協同組合出版部、一九四九年）が、日本精神主義や戦争謳歌に見える学生の文章を「痛ましい若干の記録」として不掲載にした編集方針の是非が問われ、その後も改竄や原本確認の有無をめぐる議論が為されたことはよく知られている。^{注9} 同書には他の学徒兵遺稿集と比較して読書記録が極めて多く、悲劇性と親和的な「読書する学徒兵」のイメージを強める結果ともなった（第3部8章、中野綾子）。また、一九七〇年代中頃より立て続けに出版されたジュニア向け文庫の「非行少女の日記」の類には、男性作家による少女の日記原典（その存在すら覚えないが）の改変と創作的要素の追記により、あたかもその作家の私小説として変貌した例もある（第3部9章、康潤伊）。

他者による編集が介在しない場合でも、日記には必然的に虚構が伴う。日記とは往々にして、他者＝読者の眼差しを意識した自己演出の空間である。書き手は後世の読者を意識的・無意識的に念頭に置きながら記述する内容を取捨選択する。著名な人物であればその傾向はなおさらであり、自らの手で日記を改定した作家の永井荷風のような事例は、読者を意識した自己像の演出の最たるものと言えよう。^{注10} 同じく作家で言えば、ハンセン病文学の担い手として知られる北條民雄は、デビュー前から自分の書くものが「作家の日記」として読まれることを予想しつつ、同時に創作上の文体の練習場としても日記を用いた（第3部7章、大野ロベルト）。また、本章冒頭で引用した「雪国」の駒子のように、決して読まれたくないという固い意志は、いざという時には読まれたいという欲望と表裏一体で

ある。市販の日記帳の末尾に記された「私の死後はこの日記は焼き捨て、下さいね」^{注11} という不特定の読み手に宛てた伝言にも、読者に対する意識の両義性を読み取ることができよう。

日記とは、現在の自己が過去の自己を未来の自己に読まれることを想定して綴るという重層的な自己表象の場である。^{注12} どのように秘匿された日記でも、日記を読み返す将来の自分自身を思い浮かべる限り、それは紛れもない読者であり、現在の自己とは異なる他者である。時には他者の眼差しを忘れるほど感情的に綴っても、翌日には冷静にその文面に向き合い、時に抹消することもある。より公的な性格の強い書記媒体と同様に、日記に綴られる内容は取捨選択され、虚実が錯綜する。この意味において、読者を想定しない日記はない。

書き手の生きた証である日記は、読み解く者の期待を裏切ることも少なくない。それにも拘らず事実と真実への大きな期待から、あるいは社会の変動を説明する理論の傍証を求めて、一人の声を超えた意思や思想が過剰に読み込まれるとき、紙面に響く様々なノイズに耳は塞がれ、書き手の声と生活の証は暴力的に一義化されてしまう。

そうした危険を回避するため必要なのは、日記を読み解く者の期待に込める都合のよい史料としてではなく、異質な他者として向き合う態度である。それは虚実が混ざり、読み手の解釈により相貌を新たにし、書き手が想像しなかった意味が見出されるテキストに他ならない。必要なのは、日記を学的関心の「問い」に込める論拠ではなく、真摯に向き合うことでそこから新鮮な「問い」が生まれる磁場と捉えることである。本書ではこうした問題意識を前提として、プロレタリア文学を消費的に読む昭和期の役所勤めの日記（第2部3章、新藤雄介）、戦時下の陸軍病院・傷痍軍人療養所における病床日誌・看護日誌（第2部4章、中村江里）、旧制第二高等学校のキリスト教主義学生寮である忠愛寮の寮日誌（第2部5章、田中祐介）を題材に、日記の史料的可能性を探る。

本節で確認したように、近代日本においては膨大な数の日記が綴られた。次節では日記を綴る媒体となった日記帳に焦点を定めたい。人々の書き綴る営みを支えたのは、多種多様に発展した日記帳の出版文化である。

3 モノとしての日記

「疾風の如き売れ行き」——日記帳出版の牽引役としての博文館

日記をモノとして扱うとは、近代日本における日記帳の生産と流通の実態とそれにまつわる文化を問題にするところである。

日本で日記帳が初めて公に出版されたのは、大蔵省印刷局が製作した一八八〇（明治一三）年用の『懐中日記』および『当用日記簿』である。^{注13} 現物が確認できた後者を例に一日の日記の枠組を確認すると、上段に「記事」、下段に「会計」を記す構成を取り、欄外には七曜祭節、日干支、潮汐に加え、「新古雑録」が記載される【図1】。巻末には五八頁に及ぶ附録がつき、皇統略図をはじめとする諸表が示される。要するに紙面の構成は、おおむね後に普及する当用日記の類と共通すると言える。

印刷局製作の日記は毎年出版され、しばらくは唯一の発行主体として市場を独占した。一八九〇年代になると民間の事業者からも日記帳が出版されたことが確認できるが、^{注14} 印刷局製作のお墨付きの優位性は揺るがなかったものと思われる。

状況が一変する契機は博文館の市場参入である。博文館は一八八七（明治二〇）年の創業から急成長を遂げ、一八九五（明治二八）年には看板雑誌となる『太陽』『少年世界』『文芸倶楽部』を発刊し、同年に初めて『懐中日記』を出版した。博文館の記録に従えば、従来の日記出版は印刷局の独占により改良も進歩もなく、紙質は脆かつた。博文館は価格や判型を印刷局に揃えながらも、紙数を増やし、紙質を精選した『懐中日記』を出版した。これにより印刷局の日記を圧倒し、印刷局は二、三年で発行を止めたという。『懐中日記』の好評により、一八九六（明治二九）年には『当用日記』の出版を上製並製の二種展開で開始した。

自社の販売網を全国に展開して出版王国を築きつつあった博文館の日記出版は、大成功を収めた。その繁栄ぶり



【図1】印刷局発行「当用日記簿」明治十三年用（香川大学図書館神原文庫蔵）

【図2】『東京朝日新聞』1928年12月20日、朝刊、10頁

をうかがうならば、一九二八（昭和三年）二月二〇日付の『東京朝日新聞』には全面広告が掲載され、「疾風の如き売れ行き」「素晴らしい大評判 残部僅少遅れて悔を残すな」といった自画自讃の売り文句を添えて、各種の新年用日記が整然と掲げられた【図2】。そこには『当用日記』『懐中日記』以外にも、『ポケット日記』『家庭日記』『小学生日記』の名が並ぶ。判型や装幀も多岐にわたり、『当用日記』だけを取っても、大・中・小・中長のサイズがあり、装幀も総革・背革・上製の別がある。さらには『横線当用日記』『英文当用日記』の用意もある。三万円の「大懸賞」は多少なりとも人々の購買欲を刺激したであろうか。このように多種多様な出版展開により、博文館は日記帳の出版文化を牽引したのである。

「天井を突く」日記帳

もっとも、日記帳の出版文化を支えたのは博文館のみではなかった。出版各社からは毎年新たな日記帳が生まれ、出版界を賑わせた。その甚だしさを窺えるのが、一九三一（昭和六）年二月二日の『東京朝日新聞』の



【図3】『東京朝日新聞』1931年12月2日、朝刊、13頁

記はもう古いとあつて超当用、超自由——いやまだあるいはく育児、備忘、書道、農家、家督、軍隊、徒然、クリスチャン等々数へ上るのに骨が折れる位」であり、その数は一七二種にのぼったという。「一両年前までは日記といへば当用日記と相場がきまり種類も約四十種」とあることを踏まえると、短期間で市販の日記帳の種類は約四倍に急増したことになる。

日記帳出版の隆盛はこれにとどまらず、その点数はさらに増加した。五年後の一九三六（昭和一）年一月二〇日の『東京朝日新聞』には「各種『日記帳』風景 一年の日の数よりもまだ多い」と題した記事がある【図4】。この時、翌年用の日記帳は二〇以上の出版社から、概算で三〇〇種類以上が刊行されたという。五年前の総数の約一・七倍の日記帳がこの年に出版された計算になる。有力出版社で言えば、この記者の手元には三省堂が一〇種類、博文館は三六種類、国民出版社は三二種類、改善社は二三種の日記帳があった。記事では購入者の果たして何割が大晦日まで書き綴るかや押入れに保管しながらも、「兎も角日記と人間生活との干渉は段々深められて行くことだけは疑ひなき現象」であり、「今や日記類は押しも押されぬ重要な出版物の一つとなつた」と認めている。

記者は続けて日記帳の多様性についても筆を割く。判型は「菊判の大より新菊、四六、菊、四六半裁、細長袖珍」と次第に細まって遂にはチヨッキのポケットに深々とはひるほどな豆形」に至るまで各種あり、装幀も「クロス、背革、総革、型押、箔・色押、天金、三方金、更に鍵までかゝる豪華弄奇」に分かれる。内容に関しては、一番需要が高い当用日記のほかに、「家庭・婦人向、小・中・女学生用、修養めくもの、職業的専門的のもの、文芸・趣味本位のもの、統計を主としたもの、家計中心のもの、この外に英文用のもの」がある。同紙の翌日の紙面には

「何でもござれの特種日記帳 連綿三年継続のやら鍵のかかる極秘用」（『東京朝日新聞』一九三六年二月二日、朝刊、一六頁）と題した記事があり、各種の日記帳をさらに細かく紹介している。

日記帳出版の多様性を、〈近代日本の日記帳コレクション〉所収の日記帳からも窺ってみよう。まずは一日の枠組を極力排した『自由日記』（第一書房）があり、作家の名句や文壇の最新情報を網羅した『文章日記』（新潮社）、『新文芸日記』（新潮社）、『文芸自由日記』（文芸春秋社）、『文芸行動日記』（サレン社）などがある。学校生徒用の『夏休みの日記』では、『夏季休業日誌』（尚文堂）、『夏休おさらひ日記』（厚明社）などが確認できる。女性向けの日記では、『少女日記』（婦人之友社）、『少女ダイアリー』（宝文館）、『女学生日記』（国民出版社）、『令女日記』（宝文館）、『主婦日記』（婦人之友社）などがある。趣味用では『俳句日記』（東雲堂書店）、『短歌日記』（東雲堂書店）、『演芸趣味日記』（春陽堂）、『山日記』（梓書房、のち若溪堂）、『釣日記』（朝日新聞社）、『カメラ日記』（第一書房）、『歌劇日記』（宝塚歌劇団）などがある。市販の軍隊日記では、『軍隊日誌』（春秋社）、『戦陣日記』（清教社）、『戦友日記』（陸軍美術協会出版部）、『つ



【図4】『東京朝日新聞』1936年12月20日、朝刊、16頁



【図5】『小学生日記』表紙

の日記帳コレクション²⁵⁶)は、進学に合わせて表紙の「小」の字を「中」に自ら改めた一例である【図5】。またもちろん、「雪国」の駒子のように、日記帳の枠組を窮屈に感じてノートを選んだり、あるいは日記帳を自作する場合も少なくないと言える。

国外への流通

市販の日記帳は国内各地に流通したのみならず、戦場にも送られた。一九三九(昭和一四)年末の博文館の広告では、翌年に控えた「皇紀二千六百年」を言祝ぐとともに、「将兵に日記を 慰問袋にゼヒ一冊!!」との文言が現れる【図6】。銃後から戦場に送られた慰問袋には一般的に日用品、衣料品、食料品、雑誌類などが入れられたが、そこに日記帳も含めることの勧めである。出版社の売り文句であることを差し引いても、その戦略により触発され、ある

いは根拠となった需要の存在は無視できない。

日記帳は、近代日本の植民地、すなわち「外地」にも流通した。入植者用の日記としては、例えば満洲国通信社が編集した『協和当用日記』(近代日本の日記帳コレクション²⁷⁷)がある。植民地において、日本式の日記帳は入植者のみならず、支配下にあった現地の人々にも使用された。満洲国の南満中学堂の生徒であったY氏は、日本書籍の販売店で『学生日記』(国民出版社)を^{あがな}買い、日本語と中国語の二言語を使い分けながら日記を綴った(第5部13章、高媛)。

日記帳の「外地」への流通は、モノとしての日記帳が現地で使用された事実のみを意味しない。植民地下台湾での日本語教育では、日本式の綴方教育が導入され、日記教育も取り入れられた(第5部14章、大岡響子)。それは支配者の言語同化政策であると同時に、出来事と内面を真摯に書き綴るといふ規律的な書記習慣の導入を通じた国民化政策の一環であったと言える。

博文館日記が「国民に日常身の事実を記録する習慣を養成したる効果は絶大^{注16}」と見なされるように、日記帳は書き綴る習慣を促す役割も果たした。次節ではそのことを踏まえ、「行為としての日記」に焦点を移したい。

4 行為としての日記

日記をリテラシー史に位置づける

行為としての日記とは、日記帳の体裁や書かれた内容に着目するのではなく、人々が日常的・習慣的に書き綴る行為自体の意味を考えることである。本節では日記行為を扱う意味を、近



【図6】『東京朝日新聞』1939年12月18日、朝刊、1頁

代日本の読み書きにまつわる歴史、すなわちリテラシー史に位置づけながら確認しておきたい。

一八七二（明治五）年の学制発布によって、日本でも近代的な学校教育制度が整えられた。発布翌年の一八七三（明治六）年の小学校就学率は平均で二八・一％（男子三九・九％、女子一五・二％）であった。^{注17}一〇年後の一八八三（明治一六）年には五〇％を超え、一九〇七（明治四〇）年には九八％に達した。^{注18}国民皆学の目標はここにおいて数字上はほぼ達成されつつあった。^{注19}高度な能力を獲得するための中等・高等教育も整備された。第一次世界大戦後になると、義務教育を終えた非進学者も、夜学校や講義録の類を利用して中等学校程度の勉強をし、卒業資格を得るものもいた。^{注20}また、義務教育修了者向けの実業補習教育も明治後期以降に発展を遂げ、一九三五（昭和一〇）年からは青年学校がその役割を担った。人々は様々な教育経験を通じて読み書きの能力を獲得し、以後の日常生活でそれを実践していった。^{注21}

デヴィッド・ヴィンセントが端的に述べるように、リテラシーの獲得と実践によって、人々は空間と時間を越えて他者の思想や知識と繋がるのが可能となる。^{注22}近代においてリテラシーを有する者の割合は、もはや一部の有識者にとどまらず、識字層の割合は学校教育を通じて爆発的に増加した。換言すればそれは、居住地域の物理的制約を超えて他者と繋がることを欲望する人々が無数に登場したことを意味している。近代に繁栄した出版文化とそれを支える流通網の根底には、そのようにリテラシーを獲得した人々の欲望があった。

獲得された「読むこと」の能力は、賃金を得るための職務に生かされ、あるいは日々の読書や新聞閲読を通じて新たな知識や感想を得る手段となる。同じように「書くこと」の能力も、職務上に発揮されるほか、本書の主題である日記、あるいは手紙や投書、時には創作や評論などの形をとって、自身の思考の産物を公私に発信する手段となった。

書記行為における日記は、読書行為の新聞と親和性が高い。双方とも原則的には毎日向き合うべき媒体であり、その実践を通じて読み手と書き手の日常に不可欠な習慣として身体化される。「新聞を読まなければ一日が始まった気がしない」と同じ気持ち悪さが、日記を綴る行為にも当てはまり得る。このことを踏まえれば、出来事と内面を継続的に綴る日記は、習慣化と身体化に馴染みやすい、最も日常的な書記行為の反復的实践と位置づけられよう。「行為としての日記」の貴重な先行研究である西川祐子『日記をつづるといふこと』（吉川弘文館、二〇〇九年）は、個人習慣、社会慣習として浸透した日記行為が書き手の心理や行動をどのように形づくるかに注目した。西川は日記を「国民教育装置」と位置づけ、その活用によって「日記の規範が普及してゆくと、規範から意識的・無意識的に逸脱した日記もまた書かれてゆく」という視点から「規範の形成と逸脱のダイナミズム」を明らかにしようとする。^{注23}西川の見解を踏まえて述べれば、明治二〇年代後半において、日記は「国民的観念を養成せしむる」ための「適當の方法」と位置づけられた（第一部一章、柿本真代）。また、農村地域においては「農村らしい」表現を身につけ、「農民らしい」生活を送るために日記を書く行為が奨励され、日記はいわば「農民教育装置」として機能した（第一部二章、河内聡子）。教育装置としての日記による書き手の規範化は、「国民」の次元はもちろんのこと、社会階層、教育段階、中央と周縁、地域性、ジェンダーなどに応じた様々な位相で為されたのである。

西川は国民教育装置としての日記の仕組みからの逸脱として、次の三例を挙げている。^{注24}

- ① 日記をつけないこと（ただし日記帳の仕組みが代表する近代の時間編成と正面から対抗することにはなり難い）
- ② 日記帳の枠組を拒否し、ノートブックまたは自由日記帳に書く
- ③ 日記を書きとおすことで、国民教育装置の意図をこえて逸脱する（後世の読者が時代のイデオロギーを読み取る）

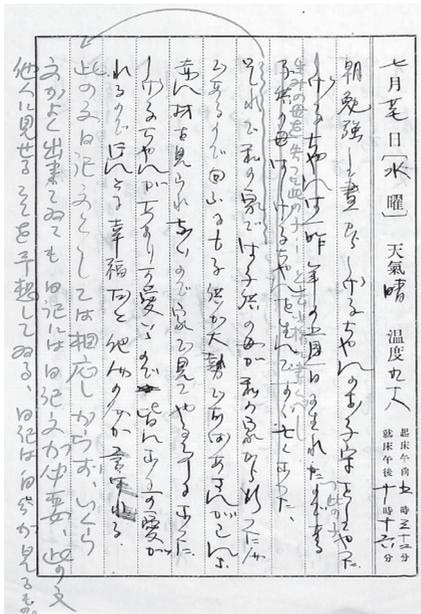
しかし逸脱の例はこれらにとどまるものではない。本章では自己を綴るメディアとしての日記に規範化と逸脱の力学が露骨に働く事例として、他者の眼差しが介在する日記に着目したい。近代日本の学校教育や軍隊教育において、日記は提出が義務づけられ、ときに点検者の赤字が入った。（近代日本の日記帳コレクション）の収録日記を例に、

そのこの意味を考察しよう。

「見られているのに見られていなさ」ふりをすること

『夏休の日記』（近代日本の日記帳コレクション）99-2）は、甲府高等女学校の生徒により一九三二（昭和七）年七月二一日から九月一日にかけて綴られた夏季休暇の日記である。日記帳には随所に教員の赤字が入り、誤字脱字の訂正のほか、記す内容の要不要や生活態度への助言が示される。

七月二十七日の日記において、書き手は起床して勉強した後、「しげるちゃん」の子守をしたと綴る【図7】。それに続く「しげるちゃんは一昨年（注25）の五月一日に生まれたのである。子供の母はしげるちゃんを生んですぐ亡くなつた」の一節に、教員は赤字を入れて端々を削除し、「生みの母を失つた此の子……と云ふ様に書くべし」との助言を付した。のみならず教員は欄外まで矢印を引いて次のように窘めた。



【図7】『夏休の日記』1932年7月27日

この文日記文としては相応しからず。いくら文がよく出来てゐても日記には日記文が必要。此の文他人に見せることを予想してゐる。日記は自分が見るもの。

教員によれば、書き手の文章は「日記文」（注25）としては相応しくない。該当箇所が教員には説明口調に響いたのであろう。この日記は、自分だけが見るべき「日記文」の規範から逸脱したがゆえに、それを咎めら

れた訳である。

教員の赤字は同時に、「読者を想定してはならない」という規範の存在を明らかにする。もちろん、「他人に見せることを予想」してはならないと諭す教員自身が、紛れもない「他人」である矛盾は明らかである。しかしここで書き手が求められるのは、点検者（教員）という明確な読者の存在を知りながら、そのことを意識せずに書くことに他ならない。この事例は日記が「見られているのに見られていないふりをする」約束事で成り立つことを如実に示すものであり、日記に綴る自己の振る舞いと他者の眼差しとの関係性の本質を穿（注26）つていえる。

日記における点検者は、時としてより露骨に規範の存在を書き手に突きつけることがある。太平洋戦争下に綴られた日記から二例を挙げて、このことを検討しよう。

戦時下に「軍国少女」であること——日記に刻まれる教員の激高

太平洋戦争期を女学生として過ごした芹沢茂登子は、戦後を三〇年ほど経たある日、引越しの最中に戦時下の日記を見出し、読み進めるうちにかつての自分の「軍国少女」ぶりに驚いたという。（注26）芹沢は日記を書いた当時の自分の思想のありようを、次のように考察している。

当時の日記は先生に提出していた。その制約は意識下にあつたとは思ふが、兵隊さんの手紙の検閲とは異なり、時折感想が一行書いてあるだけのもので、先生からのしめつけは感じられなかった。だから、私自身心にもないことを書いたとは思えない。しかし、やはりそこには「期待にこたえる学徒であらねば」という意識が働いていたはずで、建前的にその思いで生きているうちに、心底そう思ってしまうことになつてしまつたのではないだろうか。（注27）

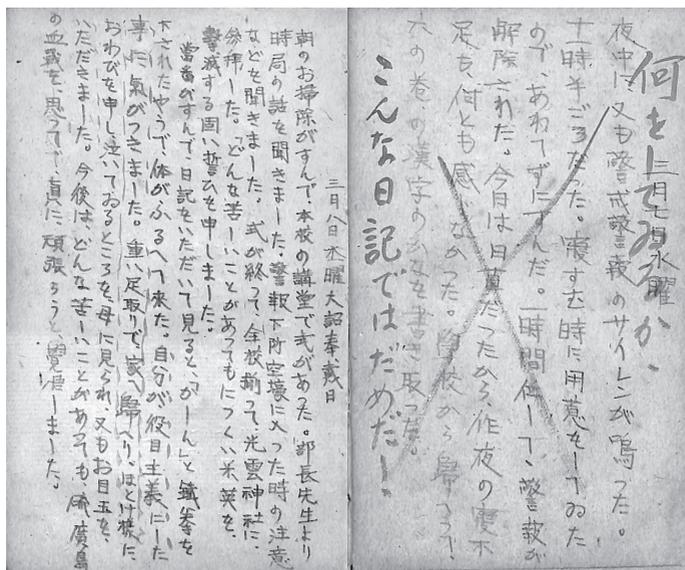
戦時下とはいえ、学校に提出した日記の内容は意に反したのではない。しかしそこには日記を通じて少女を監視する教師の眼差しがあり、芹沢はその「期待」にこたえるべく、模範的な「軍国少女」であろうとした。教師の期待に応えることは、教師が求める理想的な子ども（注28）の規範に自己を同一化することである。「心底そう思ってしまう」のは、その規範が内面化された証左に他ならない。

書き手が規範に沿う限り、権力的な規範を体现する点検者は日記の内容を是認する。しかしひとたび日記の書き手が規範を見失い、結果的に逸脱的な振る舞いをするとき、点検者＝権力者の声は紙面に顕在化して書き手を叱責する。その事例として、〈近代日本の日記帳コレクション〉より、太平洋戦争末期に国民学校の少女が綴った『Note Book』（288）を取り上げよう。

少女は国民学校初等科の五年生であり、小型の手帳に一九四四（昭和一九）年二月一日から一九四五（昭和二〇）年四月二五日まで日記を綴った。戦況が悪化の一途を辿る当時、紙資源の不足により市販の日記帳の発行は困難になり、博文館『当用日記』の発行部数も大幅に縮小した。（注29）少女が手帳を日記に代用したのも、おそらくそうした事情によるものであろう。手帳の表紙には「Note Book」と刻印されるが、少女は裏表紙に「日記」と記し、縦書きの日記帳として用いた。

日記に綴られた少女の日常は、例えば以下のようなものであった。

今日は朝から寒さがきびしかつた。お習字の時間になつて書かうとすると手がこごへて思ふやうに行かない。おべんたうをすまして分団別に並んで帰へつた。家へ着くとお母さんが「今日は早かつたね」と言はれた。それは明すの八日にくいにくい米機がかたきうちに来るかも知れないからだ。読方の十二月八日を勉強しました。夕飯をすまして珠算の割算をした。今晚はお母さんが常会に行かれたので、その間に今年の思ひ出を書き続けた
（一九四四年二月七日）



【図8】『Note Book』1945年3月7日、8日

引用からも窺えるように、少女は真面目な生徒であり、それゆえに「軍国少女」の典型でもあった。学校での学びに加えて帰宅後も進んで自習するかたわら、敵国を憎み、大本営発表の戦果を書かさず記し、日本の勝利を信じ疑わない。翌四五年に米国が硫黄島に上陸すると、「とうとう表玄関をけがされた」（一九四五年二月二〇日）と憤懣を露わにしている。

少女には定期的に日記を教員に提出する義務があった。教員は少女の日記を点検して誤字脱字を直し、「五年生らしい日記をつけよう」（一九四五年一月一七日）と穏やかな調子で反省を促した。あるいはまた、夕食後に算数の勉強を「十一時まで頑張った」（一九四五年二月二日）と記す少女の「頑張った」に傍点を付し、「身体にきをつけなさい」と（注30）労りの言葉をかけてもいる。

しかし温厚な教師の様子は一変することになる。一九四五（昭和二〇）年三月三日の紙面には、少女の日記を全否定するかのよう全体に×印が刻まれた。×印は翌日以降も連続し、三月七日の日記には「何をしてゐるか！こんな日記ではだめだ！」と激昂した教師の言葉が朱筆の大字で記される【図8】。

教員の激昂は、少女には完全に予想外の出来事であった。

当番がすんで、日記をいただいて見ると、「がーん」と鉄拳を下されたやうで、体がふるへて来た。自分が役目主義にした事に気がつきました。重い足取りで家へ帰り、ほとけ様におわびを申し、泣いてゐるところを、母に見られ、又もお目玉をいただきました。今後は、どんな苦しいことがあつても、硫黄島の血戦を思つて、真に、頑張らうと覚悟しました。

（一九四五年三月八日）

もともと真面目な「軍国少女」であつた少女の日記に、あからさまな厭戦の文言は現れるべくもない。しかし×印が付された三月三日以降の日記には、「硫黄島の血戦で、敵殺傷二千余り」（一九四五年三月三日）、「ラジオを入れると、帝都へB二十九百五十機も来襲した」（一九四五年三月四日）、「ラジオを聞いて、寝すみました。一時間位して、警報解除しました」（一九四五年三月六日）といった具合に淡々とした記述が続く。戦争と空襲がすっかり日常の一部となり、さしたる感情も交えずその日の出来事として綴る少女の日記に、おそらく教師は敵愾心の弛緩を感じ取つたのであろう。

日記を全否定された少女は「鉄拳を下された」ような衝撃を受けて落涙し、反省の後に「真に、頑張らう」との決意を新たにした。それを裏づけるように、「ラジオの知らせの大勝に、泣いてお礼を言ひました。特別攻撃隊の兵隊さんありがたう」（一九四五年三月九日）、「私が、かうして勉強してゐる間も、特攻隊の神鷲は敵艦目がけて真しぐらに体当りをしてゐられるのです。ありがたうございます」（一九四五年四月一日）など、再び模範的な「軍国少女」に相応しく、自国兵への感謝が積極的に綴られてゆく。あわせて、「ルーズヴェルトが急死したと聞いて、いい気味だ」（一九四五年四月三日）、「B二十九百七十機で来襲し、おそれ多くも明治神宮の本殿焼失、また宮城の一部に火災を起した。何となくい／＼米機だらう。いまに天ばちがあたるだらう」（一九四五年四月四日）など、祖国を脅かす敵への憎しみも再びはつきりと記されるようになる。

このように少女の日記は、模範的な「軍国少女」であることを暗黙に要求する教師の眼差しのもとに綴られた。このような状況下の喜怒哀楽は、先に見た芹沢茂登子の例が示すように、教師が体現する規範の無言の要求に沿うように意識的・無意識的に整えられたものである。ひとたびその規範から逸脱すれば、無言の眼差しは有言の叱責として顕在化し、日記の書き手は反省して再び自己の規範化に努めるようになる。教員の激高した赤字は、少女が戦時下において実践すべきであつた「模範的な少国民」の規範の輪郭を浮き彫りにするものである。

続いてもう一例、太平洋戦争下の軍隊日記を見ることとしたい。

『軍隊日誌』と「軍人精神」——恐れず、怠ることなく日記を綴れ

〈近代日本の日記帳コレクション〉に収められた『軍隊日誌』^{註20}（266頁）は、学徒出陣兵の青年の日記である。青年は一九四三（昭和一八）年二月一日に入営し、入営後四日目の二月四日から翌年の三月五日まで日記を綴つた。日記に残された捺印からは、複数の上官によつて、およそ二週間に一度の点検の機会があつたことが窺える。

日記冒頭で青年は、「早く立派な初年兵ニナリタイ」「軍隊ニナレルニ従ツテ責任ノ重大ニナツテクルコトヲ感シル。大イニ頑張ラウ」と軍隊生活の意気込みを率直に綴る。しかし入営直後から目立つ記述は、彼自身の体調不良である。例えば「朝少シ下痢シタノデ駆歩ニ参加シナカッタ残念デアッタ」（一九四三年二月五日）、「少シ熱ガ出タ様ダガス楽ニナツタ」（一九四三年二月六日）、「朝下痢シタガ別ニ苦シクハナイ。早くナホツテホシイ」（一九四三年二月七日）など、万全とは言えなかつた胃腸の不調が入営後に悪化したものと思われる。自身の快方を望みながら、しばしば母に心配をかけまいとする心遣いも日記には記される。

同年末から年明けにかけて一旦は復調し、訓練も次第に本格化した。そのような中、一九四四（昭和一九）年一月二三日の日記では、父母をはじめ、親戚や女中と面会できた喜びが語られる。母が病身を省みず会いに来たことは「誠ニ嬉シカッタ」と記し、兵営生活への努力の決意を新たにす。

父母ニ対シテ孝ヲツクス上カラモ益々ガンバラネバナラスト決意シタ。怠ケ心ガ出タ時ハ父母郷党ヲ思ヘバヨイ。父母ヲ思ツテシツカリヤラウ。

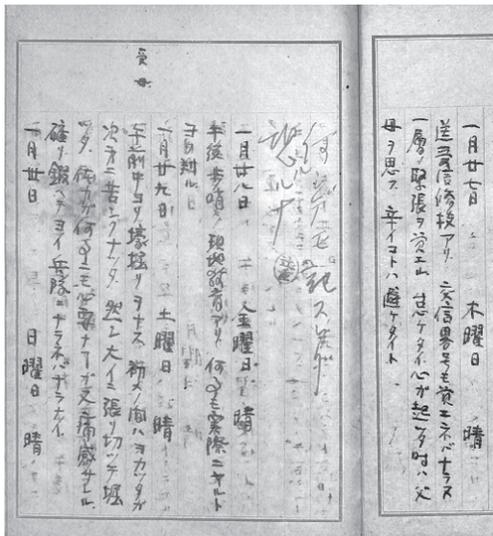
このように前向きな決意を記した青年であったが、翌日からの日記はごく短く、「舎前デ受信調整ヲナス。二度目ダガ中々難シイ。間稽古デ忙シイ」(一九四四年一月二四日)、「防空演習アリ。本講堂デ受信調整ヲナス。自分ハ人ヨリ物覚えガ悪イカラヨリシツカリシナケレバナラヌ」(一九四四年一月二五日)、「送受信修技、中々難シイ。確リヤラナイト人ニ負ケル」(一九四四年一月二六日)など、不慣れな業務に手こずり、^{はかど}捗らない反省が率直に記された。続く一月二七日には、とうとう日記を最後まで書き上げることができなかった。

送受信修技アリ。交信各号モ覚エネバナラス。一層ノ緊張ヲ覚エル。怠ケタイ心ガ起ツタ時ハ、父母ヲ思フ。辛イコトハ避ケタイト

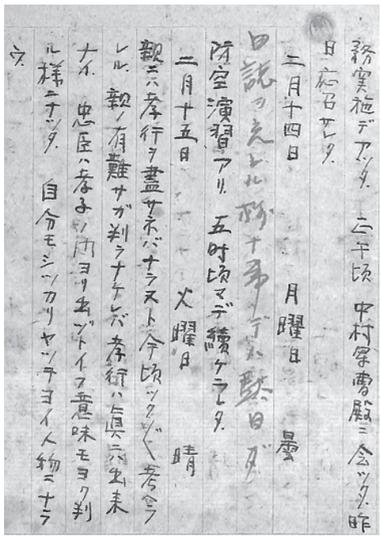
父母を思うことで自己の倦怠心を克服しようとするこの記述は、両親と面会した一月二三日の日記と重なる。しかしこの日は、「益々ガンバラネバナラヌ」「シツカリヤラウ」といった鼓舞の言葉は消え、「辛イコトハ避ケタイト」で中絶してしまった。日記点検者の上官は、赤字を書き入れてこの態度を咎めた。

何ンデモ記スンダ恐ルルナ【図9】

上官は青年に対して、恐れず、隠さず、全てを記すよう命じた。自己の内面の不調は軍隊生活において秘匿すべ



【図9】『軍隊日誌』1944年1月27日



【図10】『軍隊日誌』1944年2月14日

きではなく、素直に告白して上官に知らしめなければならぬ。翌日以降も青年は日記を綴るものの、翌月の二月一四日には、とうとう日付、曜日、天気のみを記し、日記本文は何も綴らなかつた。これを見逃す筈もなかつた。

日誌ヲ忘レル様ナ事デハ駄目ダ【図10】

「日誌ヲ忘レル様ナ事デハ」何が駄目なのであろうか。太平洋戦争中に情報将校を務めたドナルド・キーンは、日本の軍隊における日記習慣と上官の指導に関して次のように回顧している。

アメリカの軍人は、日記を付けることは固く禁じられていた。敵の手に渡ることをおそれることである。しかしこれは、アメリカ人には何等の苦痛も与えなかつた。どちらにしても、日記を付ける人間など滅多にいなかったからである。ところが(中略)日本の軍人には、新年になるとわざわざ日記帳が支給されて、この頃の学童が、夏休中日記をつけさせられるのにも似て、必ず日記をつけるようにと命じられたのである。おそらく日本の士官

たちは、その中に真の軍人精神が表れているかどうかを調べるために、定期的に兵隊の日記を読んだのである。^{注30}

キーンは日本の軍隊日記を「軍人精神」を表出すべき場であったと述べる。日本側にもこれを裏づける証言はあり、元陸軍大尉の多米田宏司は、士官学校での教育に関連して「日記なんかの場合、自分の思ったとおりを書いて、たまたま軍人精神に合致していない場合は怒られる」と述べている。^{注31}

日記の継続が「軍人精神」の堅持の証であるならば、日記の怠慢はその弛緩を意味することになる。それゆえにこそ、「日誌ヲ忘レル様ナ事デハ」軍人として駄目だったのである。軍隊日記においては、恐れず、怠ることなく、偽らぬ自己の内面を綴ることが要求される。それに従わなければ健全な「軍人精神」の欠如を疑われるのである。^{注32}日記の書き手である青年は、上官のこの叱責に承えて当日の日記を短く綴り、翌日からは欠かすことはなかったが、一度は持ち直した体調は悪化の一途を辿り、翌三月五日を最後に日記は途絶した。

リテラシー実践の自発と強制、規範化と逸脱

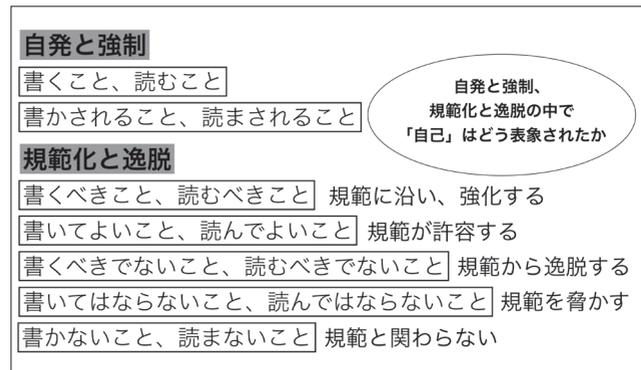
戦時下の国民学校少女と青年学徒兵の日記に共通するのは、点検者の赤字から窺い知ることのできる「書くべきこと」の規範の輪郭である。少女は愛国心と敵愾心を発露する「軍国少女」らしく、青年は「軍人精神」の体現者らしく書き綴ることが要求された。このような状況下において、書き手は自己に求められた規範の存在を敏感に察知し、それに沿うような自己を紙面に刻むべきであった。そうした実践を毎日反復するうちに、前述した芹沢茂登子の逸話が示すように、書き手がその規範を抵抗なく内面化することもある。

規範の内面化は、書き手が望んで主体的に取り組むこともあった。特攻隊隊員としての出撃命令を終戦詔勅によって中止された経験がある土田昭二は、軍隊生活では「反省日誌」「操縦日誌」「訓育」の三種の日記を書くことが義務づけられ、検閲されたと証言するが、日誌は「ストレス解消の手段」であり、「上官が間違いなく日誌を見て適切なアドバイスをしてくれるという信頼感」があったと語りつつ、次のように述べている。

三大日誌は、実に几帳面に「純真」に記述した。一週間毎に検閲された区隊長や班長の朱書きの激励や注意事項がありがたく、その一字一句を糧として、全部心に吸収し、そして「元氣」、「周到」に行動した。今思えば私の「至誠」は、「反省日誌」によって上官に伝わったのではなからうか。鉄は熱いうちに鍛えよとばかり、徹底的に仕込まれたが、絶対に批判せず素直に受け入れ、ひたすら前へ前へと進んだ。努力が結果となって表れ、上官がそれを認めてくれた。^{注33}

土田が「元氣」「周到」「至誠」に鍵括弧をつけたのは、それらが自分個人の理想というよりも、上官から求められた規範であったことを意味する。土田はそれを嫌々身につけた訳ではない。自ら望んで「絶対に批判せず素直に受け入れ」ることで理想の軍人の規範を身体化したのである。その一方で、土田の例とは対照的に、入営後の日記が「随時内務班長に提出を求められ、人事係の准尉や初年兵掛教官の視閲を終えて最終的には中隊長の捺印をうける仕組み」であったため、「一日に二行か三行、それもきまりきったこと」しか書かず、本当に書きたいことは別の手帳に密かに書いたという大内誠のような例もある。^{注34}本心を包み隠さず綴るといふ軍隊日記の規範からいえば、要求される「書くべきこと」を必要最小限にとどめて綴り、本心は「書かないこと」は紛れもない逸脱行為であった筈である。自己に求められた規範に対してどう振る舞うかは、書き手の個性と置かれた状況により、様々なヴァリエーションがある。

ここまで述べてきたことを踏まえ、「書くこと」に働く規範化と逸脱の力学の諸相を、対になる「読むこと」とあわせて整理しよう【図11】。まず、書き綴る行為は「書くこと」（自発）と「書かされること」（強制）に大別でき、



【図11】リテラシー実践の自発と強制、規範化と逸脱の力学

点検者が介在する場合の日記は後者に属する。規範を体现する権力者である点検者の眼差しのもと、まずは「書くべきこと」（規範に沿い、強化する）と「書くべきでないこと」（規範から逸脱する）を二分することができる。これをさらに、「書くべきこと」とより書き手と規範との緊張関係が弱い「書いてよいこと」（規範が許容する）、「書くべきでないこと」より緊張関係が強い「書いてはならないこと」（規範を脅かす）を検証する視点も見出せる。これらに加えて、そもそも規範を拒絶し、あるいは無視するような「書かないこと」の事例も視野に入れる必要がある。

女や青年が「書いてはならないこと」を綴ったとしたら、「書くべきでないこと」の比ではない重大な結果をもたらした筈である。日記は自己を綴るメディアであるが、そこでの自己は規範化と逸脱の力学の中で表象される複雑さを孕んでいる。

明治期以来、日記は子どもの文章力の向上や勤勉習慣の定着にとどまらず、成長管理の教育手段として活用された（第一部1章、柿本真代）。教育者は性別、学年などに応じた「かくあるべき」規範に沿った行動と感情を子どもの

日記に期待し、子どもはその期待を内面化して、模範的に、すなわち「良い子らしく」書き綴り、あるいは逆らって逸脱的に振る舞ったであろう（それが「悪い子」になる）。大正期の綴方指導では、日記は「児童の偽らない告白」であり「その赤裸々な記述の中には一種の貴い或るもの」が潜在するものと見なされた。^{注35} 日記という媒体に期待されたそのような真実性と純粋性は、都市と農村の対立軸においては農村でこそ体现可能な理想とされ、虚飾のない素朴な「農村児童らしく」書き綴る子ども像が創造された（第一部2章、河内聡子）。また、女性こそが純粋性を担うという男性作家の夢想は、その発露を『蜻蛉日記』や『更級日記』といった王朝時代の日記形式の物語に見出し、それらを翻案して新たな作品を紡いでいった（第3部6章、川勝麻里）。

日記を綴る自己の規範化は、あからさまな点検者がいる場合に限らない。本章第二節でも確認したように、日記とは自己演出の空間でもある。書き手が「見られたい自己」や「見られても構わない自己」を取捨選択する限り、その基準には書き手に内面化された倫理的・社会的規範が働き、「書くべきこと」や「書いてもよいこと」が暗黙に決定される。^{注36} また、書き手自身が具体的な規範を強烈に意識して自らを律することもある。戦後の学生運動家として知られる奥浩平は、安保闘争で命を失った樺美智子の遺稿集に決定的な影響を受け、自身の成長の糧とした。奥がノートに綴った日記（一九六三年四月二九日）では、「前進しては必ず樺美智子に立ち戻ろうと思う。ぼくの心のよりどころを樺美智子にしたい」「樺美智子が（正しくは、樺美智子の死が）ぼくに反省ということを教えた」「ぼくは樺美智子の精神を正しくとらえ、それに触れ、自分を樺美智子に近づけたい」と、理想像としての樺（奥はそれを「偶像」と認めている）への志向が繰り返し語られる。いわば奥は、樺美智子という規範への同一化を誓い、実践し、反省する媒体として日記を綴っていたのである。^{注37}

規範化と逸脱の力学は、読者を意識した自己表象という意味においては、日記以外の書記行為全般にも作用する。しかしとりわけ学校教育が果たした役割に注目するならば、「国民国家に相応しい子供」^{注38}を編制する作文教育の意味を検討することは、日記教育が果たした役割とあわせ、近代日本の書記文化の実態を明らかにする手掛かりとな

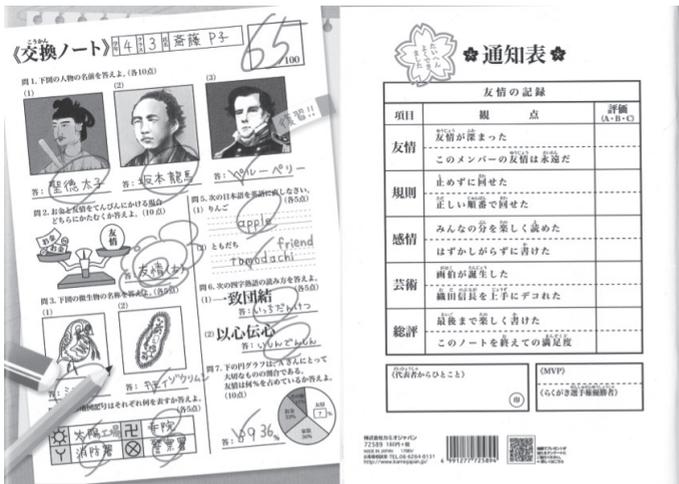
ろう。本書では学校教育における「書くこと」の意味を掘り下げるべく、日記指導をする側の教員への成長を遂げる大正期の教育実習生(第4部10章、堤ひろゆき)、「女学生」の規範を体现する高等女学校に同一化しつつ差異化を図った高等実践女学校生(第4部11章、徳山倫子)、「婦徳」の規範を強く意識しながら自己を表現した女子高等師範学校生(第4部12章、磯部敦)の事例を取り上げ、教育の場における書記文化と書き手の規範化を多角的に考察する。

【図11】で示したように、規範化と逸脱の力学は、「書くこと」と対になる「読むこと」にも働く。学校教育から一例を挙げれば、明治期の高等女学校生にとって、小説は「読むべきもの」でも「読んでよいもの」でもなかった。それは明確に、「読むべきではない」ものであり、学校や家庭の方針によっては「読んでほしくない」ものであった。^{注29}近年、読書文化の研究の進展は著しく、本書でも第2部3章(新藤雄介)、第3部8章(中野綾子)、第5部14章(大岡響子)で日記に現れた読書記録の意味を問う。そうした成果を踏まえてなお、「書くべき」と「読むべき」もを決める力学の解明は、今後も検討すべき大きな課題としてあり続けている。

5 近代日本の日記文化を浮き彫りにし、相対化するために

以上、本章では史料・モノ・行為の三点を軸に近代日本の「日記文化」の実態の一端を明らかにしてきた。たとえ他者に見られるものでも赤裸々な自己を綴るのが日記であるという観念は、過去に霧消したのではなく、今日にも継承されている。二〇一七年時点で購入できる『交換ノート』は、仲間同士、交代で一冊のノートを書き終えた後に、裏表紙の「通知表」で自己評価する形式をとる【図12】。その「感情」項目で評価対象になるのは、「はづかしがらずに書けた」とともに「みんなの分を楽しく読めた」である。これは生真面目な媒体ではないからこそ、日記をめぐる告白性の規範が今日でも広範に浸透していることを逆説的に教える事例であると言える。

教育手段として日記を活用するという発想も、教員に対する提出用の日記や連絡ノート、学級日誌といった一般



【図12】『交換ノート』(カミオジャパン発行)の表紙と裏表紙

的な形で今日に残っている。さらに露骨な事例を挙げれば、二〇一六年四月一日の『朝日新聞』は、文部科学省の主権者教育の推進策として、子どもが「お手伝い」などで家庭生活に参加するよう取り組む事項が盛り込まれたことを取り上げた。^{注31}推進策をまとめた義家弘文科副大臣(当時)は、「家庭を守らずに地域を守るか」「国がこんなお手伝いをしなさい」という話ではないが、学校が評価することは必要」と述べ、「子どもたちが手伝いの内容を記した日記を学校に提出するなどの取り組みを広げる考え」を示したという。日記指導によって「おりこう」な子どもを養成する思考も、今日なお健在であると言える。

このような書記習慣のありかたは、決して普遍的なものではない。二〇一五年八月三日、筆者はタイのチェンマイ大学で近代日本の日記文化に関する講演をおこなった際、受講生である約二〇名ほどの大学院生に対して、日記を教員に見せたことがあるかと聞いた。その反応は、経験がないし、そもそもあり得ないというものであった。二〇一七年八月二十七日に同大学(大学院生、約三〇名)で、二九日にはタマサート大学(学部生、約四〇名)で同じ質問をしたところ、回答は同様であった。もちろんこれは客観的な分析をとまわらない個人的な体験にとどまるが、先述したドナルド・キーンの回顧とあわせ、日本の書記習慣を相対化して見つめる一つの出来事ではあった。

本書の読者にも、日記を書き、あるいは書かされた経験をもつ人は多いであろう。戦前戦後を問わず、日本の義務教育を受けて

育った人々の多くは、学校の日記指導を受けたことがある。年末年始の書店に様々な日記帳が並ぶのも、ごく自然な風景として受けとめられてきた。それらの事象はあまりにも自明な事柄として認知されていたために、これまで他の地域や時代と比較して相対的に見つめる機会が少なかつたとも言える。本書ではそのような近代日本の日記文化を浮き彫りにし、相対化するために、ヨーロッパの日記文化と研究状況（第6部15章、宮田奈奈）、近現代タイの日記文化（第6部16章、西田昌之）、日本とイタリアの中世の日記文化（第6部17章、松園齊）に関する論考を収めた。

日本は「日記の国」であると言われる。赤裸々な自己語りに価値を見出す「私小説」の独自性の起源が、平安以来の日記文学に求められることも少なくない^{注44}。しかしまず必要なのは、近代日本における日記文化の隆盛を、聞き心地の良い文化的な持続性の議論から一旦切り離し、明治以降に制度化され発達した極めて近代的な現象として捉え、日本における「書くこと」の近代」の文脈に位置づけることである。そうした抑制的な試みの過程で、近世以前との連続と断絶は改めて問題として浮上するであろう。さらにそのような近代日本の書記文化が、「私小説」がそう見做されるように、どのような意味で日本に「独自の」と言えるのかを、学際的・国際的な研究体制で検証することも今後の大きな課題である^{注45}。多分野の研究者の協力によって成り立つ本書は、以下の各章の考察を通じて、そのような研究を促進する一助になることを狙いとする。

▼注

[1] 引用に添える数字は岩波文庫版『雪国』の頁数を示す。

[2] 本書第7部の特別対談に登場する西村榮雄氏の『学徒労働員日記 一九四五年』（朝日新聞出版サービス、一九九七年）もその一冊に含まれよう。

[3] 福田氏の蔵書整理については、田中祐介「福田秀一先生の思い出」福田秀一『文人学者の留学日記』（武蔵野書院、二〇〇八年）で簡潔に記したことがある。

[4] 全四九二冊のうち、三二三冊に書き入れがある。未使用の日記は一九六〇年以降に集中しており、一九五九年以前に限定すればおよそ七割が実際に使用された日記帳という計算になる。

[5] 数字はコレクションの通し番号を示す。

[6] 〈近代日本の日記帳コレクション〉の日記群は国際基督教大学に保管していたが、福田秀一氏の奥様である恵美子氏の了承のもと、現在（二〇一七年時点）では筆者が保管の責任を担う。なおこのほかに〈近代日本の日記帳コレクション〉を利用した研究として、本書（第1部1章、柿本真代）でも取り上げる『日誌』（通し番号711〜716）の行軍将棋の記録に着目する高橋浩徳「日本と世界の行軍将棋 軍人将棋の発祥は日本だった」『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』第一八号（二〇一六年六月）がある。

[7] 現在筆者が代表を務める科学研究費助成事業（課題番号17K13397）では、日記のデータベース化を事業の一環として盛り込んでいる。その成果の発表は他日を期したい。

[8] 西川祐子『日記をつづるといふこと』（吉川弘文館、二〇〇九年）、七頁。

[9] この問題を扱った著作に保阪正康『きけわだつみのこえ』の戦後史』（文藝春秋、一九九九年）がある。

[10] 作家の日記の虚実については、紀田順一郎『日記の虚実』（ちくま文庫、一九九五年）が多数の例を取り上げている。

[11] 『歌劇日記 昭和十五年版』より。〈近代日本の日記帳コレクション〉²⁴⁴。

[12] 日記における重層的な自己のありかたについては、小林多寿子「自己のメディアとしての日記―近代日記の成立―」（『現代のエスプリ（日記コミュニケーション）自己を綴る、他者に語る』、第三九一号、二〇〇〇年二月）も参照のこと。

[13] 大蔵省印刷局編『大蔵省印刷局百年史 第2巻』（大蔵省印刷局、一九七二年）、二二六〜二二九頁。なお一八八〇（明治一三）年用の『当用日記簿』は香川大学神原文庫に所蔵。現物の見返し上部には「Belong to Jugoji Tadamari Matsudaira B.S. Kani Rokuban dho January 1880. Tokio Japan.」と記される。信濃上田藩の最後の藩主を務めた従五位下の松平忠礼を指すと思われる。見返し下部には「This is very useful book.」と記される。日記欄は一月一日より、約一ヶ月分の記入がある。なお、同史料の閲覧に際しては、香川大学図書館の河原佳子様に大変お世話になった。心より御礼を申し上げたい。翌一八八一（明治一四）年用の『当用日記簿』は一橋大学西川文庫に所蔵し、同大学の機関リポジトリで全頁の閲覧が可能である（<http://hemes-ir.lib.hit-u.ac.jp/da/handle/123456789/6950>）²⁴⁵。二〇一七年一月二日最終アクセス。印刷局発行の日記類に関しては、青木正美「自己中心の文学―日記が語る明治大正昭和―」（博文館新社、二〇〇八年）の第一部「本邦日記帳事始め」も参考になる。

- [14] 例えば当時の『朝日新聞』掲載の出版広告からは、以下の日記帳が確認できる。『使用日記 明治二十四年』（哲学書院）、一八九〇年一月二三日。『明治廿五年 信盛日記』（神部十三）、一八九一年二月二三日。『明治二十七年 懐中日記簿』（求光閣）、一八九三年一月二三日。『明治二十八年 医家日記』（島村利助）、一八九四年一月二二日。『二十八年 年中日記』（東雲堂）、一八九四年二月二〇日。また、他紙の広告から、『基督教新聞』では『吾家之歴史』（警醒社）、一八九一年一〇月二一日。『読売新聞』では『教育家懐中日誌』（八尾新助）、一八九三年二月二四日、『懐中日記簿』（金櫻堂）一八九三年二月二四日、などがある。
- [15] 『社史で見る日本経済史 第七七巻 博文館五十年史』（ゆまに書房、二〇一四年）、一〇四頁。
- [16] 坪谷善四郎『博文館五十年史稿本』（三康図書館所蔵）の一九三七年の項。
- [17] 文部省編『学制百年史』（帝国地方行政学会、一九七二年）より。 http://www.nex.go.jp/b_menu/hakusho/html/other/detail/1317590.htm（二〇一七年一月一三日最終アクセス）。
- [18] 『日本の成長と教育―教育の展開と経済の発達―』（『文部時報』一九六二年一月） http://www.nex.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad196201/hpad196201_2_011.html（二〇一七年一月一三日最終アクセス）。
- [19] もっとも実際には修学後の中途退学者（不就学）も多く、全国規模で卒業まで小学校に通えるようになったのはもう少し後の時期の可能性が高いとの指摘がある（土方苑子『近代日本の学校教育と地域社会 村の子どもはどう生きたか』、東京大学出版会、一九九四年）。大門正克は土方の著作を踏まえ、小学校教育の定着にとって重要な画期となったのは、第一次世界大戦後であると述べている（『民衆の教育経験 農村と都市の子ども』、青木書店、二〇〇〇年）、二〇頁。
- [20] 大門『民衆の教育経験』の特に第五章「教育の社会的機能と社会移動」を参照のこと。
- [21] 様々な教育機会を有効活用する者がある一方で、そうした制度に馴染まずに、本節で後述する語を用いれば「逸脱」する者も少なからずいた。戦前日本の「不良」生徒について扱った著作としては、David R. Ambaras, *Bad Youth: Juvenile Delinquency And The Politics Of Everyday Life In Modern Japan* (Berkeley, CA: University of California Press, 2005) が有名。
- [22] デヴィッド・ヴィンセント『マス・リテラシーの時代―近代ヨーロッパにおける読み書きの普及と教育』（北本正章監訳、新曜社、二〇一一年）、一五五頁。
- [23] 西川『日記をつづること』、六頁。
- [24] 同前、二九六頁。
- [25] 「日記文」がどのように定義されていたかを日記文範に見れば、吉野甫『日記文作法』（昭和堂、一九〇八年）には、「日記文は、日記に文の一字を加へただけ、文学の領域に入つたのである」（三頁）、「日記文は常に自分を中心になつて居るのであるから、自叙体を採るが可い。自分が自分より離れた地位にあつて、事象を客観的に叙述したのでは叙事や叙景の文としては面白からうが、日記文としては賛成が出来ぬ。日記文は自叙体で、飽くまでも自己中心の描写でなければならぬ」（五四頁）との記述がある。一例に過ぎないが、参考までに記しておく。
- [26] 芹沢茂登子『軍国少女の日記』（カタログハウス、一九九五年）、八頁。
- [27] 同前、九頁。
- [28] 青木『自己中心の文学』（一九九頁）では、博文館新社の社長を務めた大橋一弘氏の発言として、一九四五（昭和二〇）年の『当用日記』の発行は二万部であったと紹介している。
- [29] 「日記」と「日誌」の違いは、国語辞書等の定義を踏まえ、前者が個人が綴る出来事と内面の記録、後者が組織や集団の中で個人ないし複数の者が綴る出来事中心の記録、と一応分けることができる。しかし本書（第一部1章、柿本真代）の注「6」で柿本真代も述べるように、実際には使い分けがない場合も多かった。
- [30] ドナルド・キーン『百代の過客 日記にみる日本人』（講談社学術文庫、二〇一一年）、二五―二六頁。
- [31] 軍大尉を務めた多米田宏司の証言。飯塚浩二『日本の軍隊』（岩波現代文庫、二〇〇三年）、四二頁。
- [32] 日本の軍隊教育において日記が果たした役割については、一ノ瀬俊也『近代日本の徴兵制と社会』（吉川弘文館、二〇〇四年）の第一部「兵士が軍隊生活の『所感』を書くこと 軍隊教育の『側面』が参考になる」。
- [33] 土田昭二著・林えいだい編『特攻日誌』（東方出版、二〇〇三年）、五頁。
- [34] 大内誠『兵営日記 大戦下の歩兵第27聯隊』（みやま書房、一九八八年）、六―七頁。
- [35] 友納友次郎『尋常小学綴方教授書（第三学年前期用）』（目黒書店、一九二一年）、一一―一二頁。
- [36] もちろん、その規範から逸脱した予想もしない内容が書き記されることが、日記の面白さでもある。
- [37] レッド・アークアイプス刊行会編『奥浩平 青春の墓碑』（社会評論社、二〇一五年）、九七―九八頁。なお、この事例に関しては「近代日本の日記文化と自己表象」第二回研究会（二〇一四年二月六日）で報告された道家真平「〈学生〉たちの記録行為 戦後学生運動の現場から」で得た知見と示唆が大きい。感謝とともにここに記す。
- [38] 高橋修「作文教育のディスクール 〈日常〉の発見と写生文」小森陽一・紅野謙介・高橋修編『メディア・表象・イデオロギー 明治三十年代の文化研究』（小沢書店、一九九七年）、二五八頁。

〔39〕 稲垣恭子『女学校と女学生 教養・たしなみ・モダン文化』（中公新書、二〇〇七年）の第一章「文学少女」を参照のこと。

〔40〕 近代日本の読書文化の研究成果は、和田敦彦『読書の歴史を問う』（笠間書院、二〇一四年）を参照のこと。

〔41〕 『お手伝い』 政治意識向上? 『朝日新聞』二〇一六年四月一日、三九頁。

〔42〕 例えばキーン『百代の過客』、一八頁。

〔43〕 例えば近年の研究では、戦場で綴られた日本・中国・アメリカの兵士の日記を多数分析した著作として、Aron William Moore, *Writing War: Soldiers Record the Japanese Empire* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2013) がある。国際的な共同研究の成果をまとめたものとしては、鄭炳旭・板垣竜太編『日記が語る近代 韓国・日本・ドイツの共同研究』（同志社コリア研究センター、二〇一四年）、および板垣竜太・鄭炳旭編『日記からみた東アジアの冷戦』（同上、二〇一七年）があり、論集全体をセンターのウェブサイトにからダウンロードできる。日記、あるいはより広く「自己証言文」をめぐる国際研究はヨーロッパを中心に様々にあるが、私自身も二〇一七年はじめ、韓国全州の全北大学が主催する個人文書を主題とした国際シンポジウムで報告をおこない、総合討論では今後の国際連携が提案された (Main Currents of Personal Document Study in East Asia: Comparative Perspectives on Compressed Modernity, 二〇一七年一月一五～一八日)。シンポジウムの成果は、손현주・차윤영・이정민・양승후이・쉬수예찌・왕민치아우・정민중・타나카 유스케・츠치야 슈이치・아소 아유미・남준환・유승환 공저 『인기연구의 방법, 현황, 그리고 의의』(지식과 교양, 二〇一七年) として公開されている。